

日独比較による環境負荷の少ない循環型社会構築に関する研究

K・H・フォイヤヘアト・中野加都子

はじめに

廃棄物減量化、資源保全、環境負荷の低減化を目的とした循環型社会を構築していくために、技術的効率の向上、法制度の確立、経済的整合性のとれたリサイクルシステムの整備等が求められている。同時に、これらの目的を達成するためには、モノの生産・消費を、環境効率のよいサービスに転換していくことによって豊かさを充足させていくことが必要である。そのためには工場等における省エネルギー対策やゼロエミッション、製品のエコデザイン等の技術的対策とともに、環境負荷の低減、リサイクル社会の構築にむけた価値観の形成、ライフスタイルの選択が必要である。

特に、先進国においては、ライフスタイルや価値観の転換を抜きにして環境負荷の少ない循環型社会の構築は不可能である。このような認識のもとに、本学では平成一二年七月にシンポジウム「環境先進国ドイツに学ぶ」を開催したが、本シンポジウムに参加したドイツ人であるフォイヤヘアトと日本人である中

野の議論を通して、ドイツと日本では環境対策や法制度の要因となる自然条件、ライフスタイル、価値観等の前提条件が大きく異なることが明確になった。

このことは、ドイツが「環境先進国」として日本に広く知られ、常に「お手本」とされているものの、単純にドイツの環境対策、法制度等の結果を模倣しても有効な結果を生むことができないことを示唆している。今後、日本で環境負荷の少ない循環型社会を構築していくためには、前提条件、文化等の視点から両国の違いを明確にし、それらを踏まえた両国の特徴、長所を生かして独自のライフスタイルや価値観の転換を図っていくことが必要である。

このような背景のもと、筆者らが標記の研究課題で文部科学省平成一三年度基盤研究に研究申請を行ったところ採択され、二年間の共同研究を行うことになった。

本研究の成果について筆者らが目標としているのは、気軽に読めるような出版物としてまとめることである。

本稿は、一三年度に行った調査結果の一部を紹介するものである。

第一章 自然的条件

「山紫水明」は、日本が自然と共存しつつ文化をはぐくんできたことを象徴する美しいことばの一つである。

東京オリンピックが開催された昭和三〇年代まで、日本の水は世界一おいしいといわれてきた。これを証明したのは外国から来る船員たちで、外国船が寄港するたびに日本の水を大量に積み込んで出港したと言われている。日本の水がおいしかったのは当然、水が汚れていなかったからである。その理由は、昭和三〇年ごろまでし尿が大切な肥料として田畑に還元・散布されたために、し尿が河川に流れ込んで汚濁源となることがなかったからである。田畑にまかれたし尿は大地の浄化作用によって浄化されて作物に吸収され、人に食べられ排泄されると再び田畑にまかれるといった、いわばリサイクルの輪ができていたために、余剰物となつて自然を汚すことがなかったわけである。

東京オリンピック後に日本は破竹の勢いで経済的發展を遂げ、農業でも化学肥料が大量に使われるようになった。下水道整備も進展し、一見、豊かな文化的国家を形成しはじめたように見えた。一方で、いなくなつたし尿や、この頃から大量に使われるようになった合成洗剤等が水を汚しはじめた。都市部では水のかび臭が問題になりはじめ、飲み水の安全性にも不信感が

抱かれるようになった。水の異変と戦うために大量の薬品が使われるようになり、薬品づけの水道水は一層の不信感を抱かせることとなった。現在では「おいしい水」をつくるためにオゾン処理を含めたコストのかかる高度処理が行われるに至っている。

水は降雨が地上の様々なシステムを経て流れ出てくるものであるため、その国の自然環境のレベルを最終的に示す指標でもある。水が世界一おいしかったということは、日本人が世界に誇る良好な自然環境を維持してきたことを示している。豊かさが経済的、物質的な豊かさのみを指すのでないとすれば、日本は自然の恩恵を存分に享受しながら世界一級の豊かな暮らしを営んできたことになる。

そして、日本人が昭和初期まで当たり前のこととして営々として続けてきたし尿の田畑への還元に象徴される、現代人からみれば決して文化的でない、自然界の循環作用を基本としたライフスタイルが自然を守り、その豊かな自然は独特の文化を發展させる原動力となつてきたのである。

「山紫水明」は経済的、物質的側面のみから見れば日本が貧しかったことを象徴することばである。同時に、人間が自然と切り離れた存在ではありえないことを謙虚に受けとめて形成されてきた日本の文化を象徴することばでもある。

現代のごみ問題、エネルギーの多消費によって起こる様々な環境問題は、日本人が長年にわたって築いてきた独自の文化や

自然環境を軽視して、欧米の文化やライフスタイルを表面のみ単純に輸入してきたことと深い関係にあるように思われる。

ドイツでも、独自の自然環境を基盤とした文化やライフスタイルが形成されてきたはずである。

第一章では、まず、両国の自然環境の違いがどのような文化やライフスタイルの違いを生み出しているのかを検討する。

国の大きさと人口

日本の国土面積は約三十八万平方キロメートル、ドイツは約三十六万平方キロメートルであり、面積の上では日本とドイツはほぼ同じぐらいといつていいだろう。しかし、日本の場合は国土の約三分の二（六七％）が森林で覆われているため、可住面積は国土の五分の一ほどである。農地は約一三％、住宅地と道路で約六％である。つまり日本の国土の大方は山であり、少ない平野の都市部に人口が密集しており、農地も少ない。

ドイツでは、森林の占める面積は国土の約三〇％であり、高山はなく、概して国土全体が平坦である。農業用は約五四％、居住地と交通用で約一二％を占める。国土全体が平坦ということもあって、ドイツでは企業活動の拠点が面的に点在しており、日本のように沿岸部の主要都市に集中しているということがない。

日本の人口は約一億二千六百万人（一九九八年）であり、人口密度は全国平均で約三三七人／平方キロメートルである。ド

イツでは人口約八千二百万人、人口密度約二三〇人／平方キロメートルと人口は日本の方が多く、人口密度も日本の方が過密な状況である。

日本では、人口が東京都の一一八三万人を筆頭に、大阪府、神奈川県、愛知県、埼玉県の上位五都府県で全国人口の三四％を占めている。人口密度も東京の一平方キロメートル当たり五四一〇人を筆頭に上位五都府県が全国平均よりかなり高くなっている。そして、東京、横浜、大阪、神戸、福岡等の人口密度の高い都市が消費やライフスタイルをリードしている。

ドイツではハンブルク、ケルン、デュッセルドルフ、ベルリン、ミュンヘン、フランクフルトといった都市が消費やライフスタイルをリードしている。しかし、情報発信源としての都市間の序列は少なく、日本で東京発の情報が国全体に大きな影響を与えている状況とはかなり違う。

気候

気候の違いはライフスタイルに決定的な影響を与える。その意味でここでは具体的なライフスタイルの違いを紹介しながらはなしを進める。

日本列島は南北に長く、緯度的にも変化に富むうえに、起伏に富んだ山脈が日本列島を縦横に走っているため、気候の地域的差異もきわめて大きい。そのため、日本は島国で海洋性の温和な気候であるにもかかわらず、同じ島国のイギリスやニュー

ジーランドに比較すると東岸は冬の寒さが厳しいという多様性に富んでいる。

また、雨量の点では、年平均降水量がヨーロッパでは平均して五五〇ミリ、北米大陸で六五〇ミリ程度にすぎないのに対し、日本では一七〇〇―一八〇〇ミリという多雨国である。雨が梅雨、台風時に集中するという特徴のほか、夏季は海洋性の高気圧圏内に入るため、極めて多湿となる。

気温は東京では五・三度―二七・二度、大阪は五・九度―二九・四度（一九九八年）であるが、最近では夏場の最高気温が四〇度近くなることもある。

ドイツでは夏は日本とかわりないほど暑くなる地域もあり、ライン川近くの暖かいところでは二五度以上の日が四〇日程度ある。しかし、海岸に近い地方では一般的に日本より気温が低く、一日全体の気温が氷点下以下の「氷の日」と呼ばれる日が年間二〇日程度ある。平均しておおよそ北海道ぐらいの気温と思えばいいであろう。

湿度の違いと洗濯方法

ドイツではオフィスビル等を除いて、一般の家で冷房用のエアコンを設置しているところはほとんどない。これは、夏場の気温は日本と同じぐらい高くなることはあっても湿度が低いために、それほど不快な暑さと感じないからである。日本では冬場のよほど乾燥した時期を除いて湿度は六〇―八〇%程度であ

るが、ドイツでは四〇%以下が普通である。日本で四〇%以下であると異常乾燥注意報が発令され、火災に対する注意が呼びかけられる。

湿度の違いはライフスタイルの違いともなっている。日本では洗濯物は屋外に干すのが一般的である。しかし、ドイツでは日照時間が短く、部屋の中でも湿度が低いため、むしろ室内の湿度を上げるために屋内に洗濯ものを干す。乾燥している室内で洗濯物も十分乾くのである。屋外に干す家庭もあるが、中庭や裏庭等に干すことが多い。

日本では日照時間が長く、「日光にさらす」のが最も早く乾き、殺菌効果に優れていると考えられている。表通りか裏通りかというよりは、直射日光を受けやすいところに洗濯物を干すということが習慣になつていえるように思われる。そのため、住宅が密集している地域でも、堂々と表通りに洗濯物が広げられていることにそれほど違和感がない。

ドイツでは日本ほど日照時間が長くないこともあって、殺菌に対する感覚が異なり、高温で洗濯することが殺菌につながると思われる経緯がある。現在でもドイツでは洗濯に四〇度から六〇度ぐらいのお湯が使われるが、一昔前には九八度程度の高温のお湯が使われてきた。ドイツの洗濯機は現在の製品でも九五度に設定することができ、新生児の衣類やふきん等はこのような高温で洗うことが多い。

洗濯機の構造も日本とはかなり違い、一二二〇ボルトという高

圧電圧のもと、日本のように洗剤を入れてかき混ぜるというやり、むしろたたきつけるという感じで、洗濯物はとてもきれいになる。このため、ドイツでは毎日のように洗濯をするということではなく、多くの場合、一週間分ぐらいためてまとめて洗う。

日本では少しずつでもほとんど毎日のように洗濯を行い、日々の洗濯では途中で洗濯機をとめて、洗濯物を足すこともできる構造になっている。洗濯の仕方でも手洗い用、大物洗い用、つけ置き洗い用など、微妙に変化させることができる。ドイツの場合は途中で洗濯物を足したりすると、最初から設定し直しということになるので、そのようなことはしない。

洗濯後もドイツでは下着、パジャマ、シーツ等は干した後に、さらにアイロンをかけるのが普通である。日本では下着にアイロンをかける家庭はかなり少ないであろう。

このように、洗濯にまつわるライフスタイルひとつをとっても日独の間かなりの違いがあり、それは気候の違いだけではなく、歴史的な背景からくるものもあると思われる。

ヨーロッパの殺菌感覚

日本人からは、九〇度以上のお湯で洗濯をするというのは信じがたい。ドイツでは洗濯機がなかった頃の洗濯はむしろ「釜茹でして洗う」という感じで、沸騰したお湯で殺菌するという感覚であった。これは、「高温処理しないとばい菌が残る」と考えられてきたからである。日本ではむしろ太陽光による殺菌効

果への信頼がある。

ドイツの洗濯時の「殺菌感覚」は一八〇〇年前後にヨーロッパで大流行した伝染病と関係しているのではないだろうか。

ヨーロッパの伝染病と下水処理については「舗装と下水道の文化」(岡並木著、論創社)に詳しく述べられている。例えば次のようなことである。

一二〇〇年近く(日本では平安時代)になっても当時のパリには下水道ばかりかミゾもなく、家庭の汚水、ごみ、トイレの始末までが、捨て場が道路だった。シテ島の王宮のまわりで舗装が行われようになったのは、その悪臭と泥水を何とかするためである、これがフランスにおける舗装の歴史のはじまりであると言われている。

舗装が進むにつれて雨水の吸い込みが悪くなり、かえって水たまりのひどくなるところが出てきた。それをセーヌ川に流すために下水溝の建設が始まった。これが一三七〇年におけるパリの最初の下水道となり、それ以降下水道は徐々に伸びていった。しかし、下水道の中の本格的な掃除をしたことがなかったため、下水道に汚物がつまってきた。大雨が降ると逆流が道にあふれ、その逆流が伝染病を運んだ。

街路も清潔になるところかますます不潔になってきた。ミゾに代わって登場した下水道も、家庭の台所やトイレにはつながっていないかったため、一四世紀ごろには、おまるにしたし尿を夜に窓から道に空ける人が増えてきた。「水を捨てますよ」と叫ん

でから捨てるのがエチケットだったらしいが、叫ばれても逃げの暇のない被害者がずいぶんいたらしい。これはパリだけでなく、ロンドンやヨーロッパのその他の人口の密集する都市でも同じだったらしい。

このようにして、一八三二年春のコレラの大流行では下水道が菌巢となり、セーヌ川からとっていた水道はコレラ伝染の媒体になったという。

ロンドンでは、一七世紀になっても中心部の「シテイ」(二・七平方キロ)でさえ未舗装の道が多かった。その未舗装の道でも、パリと同じように、雨水や汚水が道の中央部へ流れるような勾配をつけていた。そしてパリと同じようにごみを捨てた。

ジェオフリー・ミドウルトンは「ペストとロンドン大火の時代」の中で次のように書いている。

「ごみは道の上で腐敗し、悪臭を放った。夏になるとそこにうじがわいた。夜はネズミが出てきて、食べるものを探すために腐ったごみの間にもぐりこんだ。」

つまり、一八〇〇年頃には現在の文化的なEU諸国のイメージとはかけ離れた状況にあり、そのことが深刻な伝染病被害につながったのである。

日本のし尿処理による環境保全

一方、日本では同じ一七〇〇年から一八〇〇年ごろ(江戸時代)、舗装や下水道がなくても、江戸はロンドンほど不潔ではな

かったし、コレラ等の伝染病の大流行も少なかった。一八五八年のコレラの流行による死者は四万人程度だったと言われている。

日本の江戸時代後期、町人が住んでいた地域の人口密度は一平方キロ当たり約八万七千人と、当時のヨーロッパの大都市の約六万人より高い、世界でも最も人口密度の高いまちであった。町人の生活は棟割長屋という土間も入れて八畳程度の居住環境であった。向かい合う長屋をはさんで狭い路地があり、突き当たりには共同の井戸とトイレとはきだが並び、路地の真ん中には各家からの汚水を流すドブがあったという。

一九世紀にオランダ商館の一等書記官であったフィッセルの江戸への旅行途中の風景として、

旅行者にとって、何が不愉快だといって、肥料が施されたばかりの畑地の悪臭、絶えず畑に運んでいくために溜めておく下肥、とりわけ村の中で家々のそばにおいてある下肥の山や肥溜の悪臭ほど不愉快なものは他にない(J・F・フィッセル『日本風俗備考』庄司三男・沼田次郎訳、平凡社・東洋文庫、一九七八年)

と述べているように、当時の日本ではし尿をヨーロッパの国々のように捨てたり流したりせず、完熟させて肥料として土に返していた。

江戸がやがて百万都市に成長し、野菜の需要が増えて農家が自分の家のし尿や堆肥だけでは足りなくなった頃には、し尿の

仲買人まで現れて売買が始まったという。

一見、非衛生的に見える環境にもかかわらず、伝染病の流行が少なかった理由として、厠の研究で文学博士となった李家文氏は「何といっても当時の日本はヨーロッパと違って、し尿を捨てたり流したりせずに、肥料として土に返す知恵をもっていたから」と述べている。

つまり、し尿を完熟させて肥料として使っていたために川を汚すということがなかった。このようなサイクルのおかげで、水を媒介とする伝染病の蔓延が防げたということなのである。

また、運び出されるし尿に関してはフィッセルが記しているようにかなり不愉快なものであったらしいが、一方で、幕末の英国駐日総領事であったオールコックは、次のように述べている。

よく手入れされた街路は、あちこちに乞食がいることをのぞけば、極めて清潔であつて、汚物が積み重ねられて通行を妨げるということはない（中略）風通しの良い家にすみ、その家は広くて風通しの良い街路に面し、そしてまたその街路には、不快なものは何物もおくことを許されない。：すべて清潔ということにかけては、日本人は他の東洋民族よりまさっており、とくに中国人にはまさっている（R・オールコック『大君の都』山口光朝訳、岩波文庫、一九六二年）

現代人から見ると一見、不潔で文化的でないと嫌われたし尿

の農地への還元が伝染病の蔓延を防ぎ、洗濯物についても太陽の恵みによる殺菌で十分というライフスタイルを生み出してきた。

一方のヨーロッパでの伝染病の問題は、いち早く下水道を整備し、清潔なまちづくりを行う契機となった。

ドイツでの殺菌感覚も独特の文化やライフスタイルへとつながっていた。これは、テーブルクロスにも象徴される。真っ白でピンピンのテーブルクロスはいかにも高温殺菌した清潔な布という感じがする。ドイツでは色や柄の入ったテーブルクロスはなく、真っ白か白の柄模様というのが一般的である。

煙突つきドイツの家と日本の暖房器多目的利用

冬の気温がかなり下がるドイツでは、夏の冷房用のエアコンがいらぬ代わりに冬の暖房は欠かせない。ドイツの住宅には必ず煙突がついているが、これは各住宅の地下などで灯油や天然ガスを使って集中的に温風をつくる際の排気と煙の排出のためである。構造としてはいわゆるセントラルヒーティングであり、地下で集中的につくられた温風は各部屋に配管を通じて運ばれる。各部屋では熱交換器で温度調節などができるようになっている。

地下の集中暖房機は二四時間運転されており、基本的には全館暖房で、各部屋に暖房器具を置く習慣はない。

また、煙突掃除屋という日本にはない職業があり、各家を回

るこの職業の人は煙突掃除から類推できる各家庭のライフスタイルに結構うるさく口出しする存在である。

日本では北海道のように特に気温の低い地方を除いて、全館暖房の世帯は少ない。多くは部屋ごとに石油やガスを燃料とする暖房器具や、最近では冷暖房兼用のエアコンが設置されていることが多い。昭和二〇年代から三〇年代頃までよく使われた火鉢や石炭ストーブ、石油ストーブでは暖房と同時に鍋ややかんをかけて煮炊きもしてしまう「多目的利用」が一般的であり、燃料が効率的に利用されてきた。

煮炊きを兼ねてきた日本の伝統的な暖房方法は、ドイツ人から見ると、家の中で野外活動をしているように見えるという。日本では特に寒い地方を除いて、気温が〇度以下になる期間が限られているという事情もあるが、必要な部屋のみ必要な時間だけ暖房し、しかも燃料を多目的に用いる方法は、資源の少ない国に生きる日本人の知恵による省エネルギー型ライフスタイルと言えるかも知れない。

食生活と買い物

環境面で日独が比較される場合に必ず引き合いに出されるのがごみの問題である。例えば京都大学植田教授の調査によると、ドイツでの最終的に処分する一世帯一週間当たりのごみ量は、日本の四分の一という大きな差がある。しかし、ごみは生活、特に食生活に伴って出てくるものであるため、排出されるごみ

量のみでなく食生活の違いから較べてみるべきであろう。

ドイツの朝は早い。午前七時から七時半には一般企業の活動が始まるため、六時過ぎに起きる家庭が多い。そして事務職の場合、午後四時半には仕事を終えて帰宅し、それ以外の職業でも午後五時半には完全に終わるということが多い。

朝食は現在の日本と同じようにジャム、チーズ等をつけたパンと簡単なサラダ、飲み物というパターンが多い。昼食はそれぞれの職場でのランチ風のもの、子供についてはドイツでは給食がないため昼食に帰ってくる。その際には土曜日、日曜日に少し豪華にした昼食の残り物で子供用の昼食をつくるということもある。

ドイツでは平日の夕食もハム、ソーセージ、チーズ等をのせてパンを食べるといことが多い。サラダ等をつけたり、ビールを飲んだりすることもあるが、基本的には夕食も豪華にするということはない。このため、日本のように夕食のために毎日のように買い物に出かけるということもない。多くは一週間に一回か二回程度、車でまとめて買い物に行く。

車で通勤するのが基本であるドイツでは仕事が終わった後に職場の仲間へ飲みに行くという習慣がない。平日はまっすぐ家に帰って、ガーデニングを楽しんだり、趣味を楽しんだりする。職場の仲間とのコミュニケーションなどは土曜日、日曜日のホームパーティで行うことが多い。

一方、日本では午前九時はいまりの企業や役所が多く、一応

午後五時か六時には仕事を終わることになっているが実際には深夜まで働くことが珍しくない。食生活面では、朝食は簡単にすませるが昼食も麺類やランチ風のを食べ、夕食はかなり豪華にすることが多い。家庭の主婦は夕食のために毎日のように買い物に行き、主食以外に何種類もの料理を準備する。内容も和食、洋食、中華など様々なものが取り入れられる。食材の調達方法もまちの市場、スーパーマーケット、二四時間営業のコンビニエンスストアから通信販売まで多様である。おまけに基本的には翌日配達の家配便の普及や冷凍技術や真空包装の急速な進展のおかげで、日本のすみずみから産地直送の食材を手に入れることもできる。そのため、個別包装された多種多様な食材からは大量のごみが出るということになってしまう。

外食の場合でも、よほど遅い時間でない限り、和食、洋食、中華の好みの料理をいつでも食べられる。交通渋滞と駐車場の確保が困難な日本では自家用車での通勤にも制限がある。そのためばかりではないが、日本では仕事が終わった後に食事や飲み会に行く機会が多い。また、家庭でのホームパーティの習慣がないため、アフターファイブの飲み会でのコミュニケーションは実際の労働時間以上に重視されることもある。

自動販売機のないドイツ

日本とドイツの大きな違いのひとつはドイツには日本のようにまちなかに自動販売機がないことである。ドイツでも駅など

には自動販売機が置かれているが、たいてい故障して使えない。そのことに對して日本のようにすぐ苦情を申し立てるということもない。いつでもどこでもたいいの必需品が手に入る二四時間営業のコンビニエンスストアもない。

これらのことは、ドイツ人が不必要なことを単純に受け入れず変化を好まないという国民性を表している。日本では便利さを追いかける。そのことをビジネスチャンスとして参入してくる企業も多い。しかし、ドイツでは不必要なことにはつきり拒否の態度をとる。そのため、たとえ自動販売機やコンビニエンスストアを日本のように導入しようとしても国民が認めないであらう。

日本ではほとんど毎日、ペットボトル入り飲み物を自動販売機で購入して授業に出るといった大学生が珍しくないし、行楽に出かける際にもわざわざ家から飲み物を持っていかなくても、現地の自動販売機で飲み物を購入できる。

昼食にもコンビニエンスストアの弁当やおにぎりが利用されることも多くなった。入学試験時や遠足でもコンビニ弁当ということもある。

ドイツでは飲み物を空いたペットボトルに入れて家から持って出かける。まちなかには弁当屋もなくコンビニエンスストアもないため、移動の途中で空腹になった時のために、パンに簡単にハムやチーズをはさんだサンドイッチやりんごを持って出かける。途中の公園や乗り物の中で家から持ってきたそれらを

食べる光景も珍しくない。

日本にある自動販売機の総数は五三七万台でその数は世界一である。飲料用のものが二七五万台である。自動販売機の消費電力が六〇〇〜千五百ワットであることから計算すると、一年間で約一〇〇億キロワット時の電力が消費されていることになる。

包装の違い

ドイツでは日本のように個別にパック包装したものは少ない。スーパーマーケットでも野菜は積み上げてあるものを必要なだけ自分で計ってビニール袋に入れ、シールを貼って買う。肉や魚でも計り売りが基本であるため、あらかじめパック包装されたものを買うのではなく紙に簡単に包む程度である。これは市場での買い物の折に、野菜を新聞紙でくるんだかつての日本のスタイルと似ている。ソーセージ類でさえパック包装より紙で包むことが多い。

日本独特の包装形態には高温・多湿な自然条件も強い影響を与えている。腐る、湿ることを防ぐために過剰包装になりがちということである。また、このような自然的な条件ばかりによるものではなく、これまで築かれてきた礼儀としての包装文化の影響も強い。これに、生活水準の向上による過剰な清潔指向、女性の社会進出や塾に通う子供の増加による個食化の進行が加わって、一つ一つが包装された食品が袋入りになっており、販

売時にはそれをさらに袋に入れるといったスタイルが定着している。

このような日本独特の背景があるにしても、ドイツの暮らしから見ると日本にはプラスチックチューブに入った歯磨きをさらに紙箱に入れる等といった無駄な包装が多い。

ドイツから学ぶこと

紙面の制約上、この他の自然条件の違いからくる文化、ライフスタイルの違いについては紹介できない。

しかし、ここまでで、例えば、ドイツのごみ量が少ないのは、分別、リサイクルが進んでいるということよりもむしろ、不要なものを単純に受け入れないといった価値観、考え方の違いが大きく影響しているように思われる。これは、「食」に対する関心が低いことや、弁当や飲み物をコンビニエンスストアや自動販売機で簡単に購入できないためにごみの発生量そのものが少ないことに象徴される。

日本では衣・食・住の中で「食」に対する関心が高い。日常生活でも、どこのお店がおいしかったかが話題になり、テレビ番組でも料理に関するものが多い。ドイツでは「食」よりも「住」に対する関心が高い。そのため、日常会話で「食」に関する話題はほとんどなく、仕事を離れた共通の話題は旅行のことが中心である。耐久消費財であるインテリアには費用をかけ、部屋にかける額ひとつでも各家庭の好みがつきり出される。そし

て、長期間にわたって愛用する。

つまり、日本では日々の消耗品に関するごみが多く排出され、そのことが日本の環境問題の特徴づけている。それに対して、ドイツでは消耗品が大量に排出されるようなライフスタイルを受け入れておらず、そのことがドイツの環境との接し方の特徴づけているのである。

それぞれの国には独自の自然条件や価値観、文化があり、それらを直接環境問題と結びつけて考えることは無意味である。例えば、「食」に関する日本での関心の高さは文化として世界に誇るレベルにあり、そのことをごみ問題と結びつける必要はない。しかし、環境問題を考える際に、「入口」で自動販売機に象徴される便利な生活が無批判に受け入れてきたことには目を向けず、「出口」でリサイクル方法や法律をドイツから安直に輸入しようとするには一考を要する。

ドイツとの決定的な違いは出口ではなく、入口である。

一度獲得した便利さを失った時の不自由さは耐えがたいものである。ドイツから学ぶことは、「出口」対策としてのリサイクル方法や法律より、「入口」で一人一人が自分にとって必要かどうかを冷静に判断し、必要なことを拒否できる主体性ではないだろうか。

人間が自然と切り離れた存在ではありえないことを謙虚に受けとめてきたのは日本文化の伝統である。欧米の便利さと環境対策の直輸入ではなく、むしろ日本の自然条件や過去のライフ

スタイルを見直し、独自に主体性を持つて現代に適合した暮らし方を考えてみるのが課題である。

参考文献

- 小島貞男、おいしい水の探求、ZINブックス、一九八五年
- 国土庁「土地白書」一九九八年版
- 総務庁統計局「推計人口」「日本統計年鑑」「国勢調査報告」
- 理科年表、国立天文台編、二〇〇〇年版
- 岡並木、舗装と下水道の文化、論創社、一九八五年
- J・F・フィッセル『日本風俗備考』庄司三男・沼田次郎訳、平凡社・東洋文庫、一九七八年
- R・オールコック『大君の都』山口光朝訳、岩波文庫、一九六二年
- 小野芳朗、〈清潔〉の近代、講談社、一九九七年

